

Title	17世紀の言語論における「普遍の鍵」
Author(s)	高田, 博行
Citation	大阪外国語大学論集. 1 p.49-p.72
Issue Date	1990-01-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79455
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

17世紀の言語論における「普遍の鍵」

高 田 博 行

目 次

- 0. 序
- 1. 教育のなかの普遍文法
 - 1.1. 母語の教育
 - 1.2. 効率的な語学教育
 - 1.3. 言語の論理的説明
- 2. 調和のなかの方法
 - 2.1. 信仰と自然と言語の調和
 - 2.2. 語と事物との一致
- 3. ドイツ語のなかの普遍言語
 - 3.1. 語の構造に見る普遍
 - 3.2. テセイとピュセイ
- 4. 新たな創造のなかの普遍言語
 - 4.1. 組み合わせの創造性
 - 4.2. 汎言語
 - 4.3. 普遍的記号言語
- 5. 結

0. 序

「普遍の鍵」——魅惑的な響きを持つこのことばは、16世紀から17世紀にかけて、現象の背後に普遍的な実在の本質を解読するための方法を意味した¹⁾。ある17世紀人も言ったように、「バベルでの言語の混乱によって、人間と人間とが互いに恐ろしいほど分断され [...] 人間たちを血と血でつなぐ自然のきづなが相当に引き裂かれ、さらには唯一の真なる神を正しく認識することが次第に遮断されてしまったのだ」²⁾ とすれば、ひとがバベルでのあの災い以前の言語、すなわち神がアダムに直接与えた原初の言語、普遍的な言語を切に追い求めたのは当然であろう。

本論文は、このような文脈において比喩的に言えば、17世紀のドイツにおいて普遍的な言語ないし言語の普遍性へ通じる「扉」を開こうと試みられた際に、いわばどのような材質のどのような形をした「普遍の鍵」が用意されたのかという観点のもとで、この世紀の言語論の流れをスケッチしようとするものである。

1. 教育のなかの普遍文法

1.1. 母語の教育

教育思想家コメニウス(J. A. Comenius: 1592-1670年)は、『大教授学』(〈Didactica Magna〉: 1657年)³⁾の「読者へのあいさつ」のなかで、こう振り返っている。

数年前、神はドイツ全土にわたって、なんんかのすぐれた人々をふるい立たせ、この人々を通じて、新しい時代の夜明け前に、いわばあけぼのの、紅の光をおくってくれたのです。この人々は、学校にありきたりの教授方法の乱脈さにいや気がさして、言語や技術を教授する上になにか楽な早道はないものかと、心を砕きました。[...] 私が申しておりますのは、ラトケ、ルービン、ヘルヴィーク [=ヘルヴィヒ]、リッター [...] のことであります。[...] 私は機会あるたびに、これらの人々を研究することができましたが、そのさいに私は、申し上げても信じてはいただけないほどの深い喜びをあげました。それは祖国の破壊と全ドイツの悲惨きわまる状態とに痛む心の嘆きを、おおかたいやしてくれるほどの喜びでありました。(『大教授学』第1巻, S. 23⁴⁾) ([]は筆者による補足。以下同様)

ここで一番に名が挙げられているラトケ (Wolfgang Ratke [または Ratichius]: 1571-1635年) は、1612年にフランクフルトでの帝国議会に『建白書』(〈Memorial〉)を提出して、「帝国全体において、一致した言語、一致した統治、そして最終的には一致した宗教を、こころよく導入し平和に保つ」ための「指針を与えることを心得ている」(Ising, S. 101⁵⁾)ことを述べ、全国民に精神的・宗教的基礎を与えるための教育改革を提起した。このような理念が、混乱の時代の学識ある者たちの心を引きつけたのは当然である。このときドイツのヘルボルンに留学中であったコメニウスは早い時期にこの改革案を知り、ラトケの教育構想にこころ惹かれた⁶⁾。ヘッセン・ダルムシュタット侯ルードヴィッヒ5世は、ギーセン大学教授であるヘルヴィヒ (Christian Helwig: 1581-1617年)とユング (Joachim Jung: 1587年-1657年)にラトケの改革思想を研究させ、ヘッセンでその方法を実際に導入するための便覧づくりを命じた。そしてこのふたりは、『ラトケの教授法に関する手短な報告書』(〈Kurtzer Bericht von der Didactica oder LehrKunst Wolfgangi Ratichii〉: 1613年)を書き上げ公刊した。そこでは、次のように報告されている。

何の目的で、神が人に言語を与えたのかを考えてみよ。人が人に神の意志と業について教え、神の創造物を認識し観察することを教え、そして有用な技芸を教えることができるように、神は人に言語を与えたのである。神の賜物はすべてが完全であり、課せられている目的を果たせないような空しいものなどはひとつも存在しない。名あるギリシャ人、ラテン人、アラビア人はこのことに注意を払い、あらゆる技芸と学問を自らの母語で行い、学校を立て [...] たので

ある。さて、異教徒やマホメットのやからはこのことをただ自然という光からのみ行ったが、[...]我々キリスト者には、自然という光の他に、福音という光と神の真なる認識があるので、彼らよりもずっと高いところへ到達できる。加うるに、あらゆる技芸と学問は [...] ドイツ語で教えて定着させたほうが、はるかに容易で、快適で、規則的で、完全で、詳しくできるということは、まったくの真実である。これによって、ドイツの言語と国民は著しく良くなり高まるだけでなく、技芸と学問自体も新しい発見、注目、補強、論究によって、えも言われぬほどに増大し、基礎がかためられ、強化され、解明されるのである。(Stötzner, S. 71f.⁷⁾)

神の教えを直接的に理解するには各自が聖書を読める必要があるので、ラトケの考える教育とはまず第一に言語教育のことである。内容の理解が先決であるから、「すべてをまずは母語で」(第5条目⁸⁾) 教える。語学教育としても、「まずは母語を」(第6条目) 教える。母語の次には、ヘブライ語を「全ての言語の母であるがゆえに青少年にきちんと教え、定着させねばならない」(Ising, I, S. 102)。そして、次にギリシャ語、ラテン語が教えられる。類縁性からすると、ヘブライ語から、カルディア語、シリア語、アラビア語と進むのもよいとされる。(第6条目)

1.2. 効率的な語学教育

1.2.1. 周知のように、近年チョムスキーとフォーコーによって、17世紀後半の『一般・釈理文法』(〈La Grammaire générale et raisonnée〉: 1660年)、いわゆるポール・ロワイヤル文法が再評価され、言語学史における「普遍文法」の存在がクローズアップされた。この「普遍文法」なるものは、多様な言語の特性のなかに一般的・普遍的な特性を見て取ろうとするものとされている。

ドイツでは、ポール・ロワイヤル文法に半世紀近くも先行して、1619年に普遍文法と自ら名づける著作が現れていた。それが、『ラトケの教授法による普遍文法』(〈Allgemeine Sprachlehr Nach der Lehrart Ratichii〉: Köthen 1619年)である(以下、ラトケの『普遍文法』と呼ぶ)。ラトケの『普遍文法』が著わされたのは、つぎのような考え方からである。言語を教授する際、「言語の特徴が許す限りにおいて」(第8条目-1)、文法の枠組みを統一しておかねばならない。生徒は、この普遍的な文法の枠組みをまずは母語を例にして理解し、そののちに母語以外の個別の文法へ進む。各言語の文法を比較対照することによって、「言語どうしの相違点と共通点がどこにあるのかも洞察しやす」(第8条目-1)く、効率的な言語学習ができる。この普遍文法は、哲学的課題というよりも、共通的な文法概念を教えるという教育学的課題を課せられた実践性に方向づいた文法である。母語の文法を教えることは、母語を育成し確固たる標準的国語を定着させるためであるとともに、普遍文法を知らしめるためでもある。ラトケの『普遍文法』は、全体で22ページからなるコンパクトな文法入門書であり、ドイツ語でのほか、ラテン語(〈Grammatica universalis〉)、ギリシャ語、フランス語、イタリア語でも著わされている。ここでは、ドイツ語版に基づいて話を進めることにする⁹⁾。この文法では、事例は挙げられず教師が教室で与えることになっている。叙述法としては、

「～とはなにか。それは、～だ」式の問答形式が採られ¹⁰⁾、そして2分法が好んで用いられている。ポール・ロワイヤル文法では、普遍文法と個別文法の区別は表明されておらず「含蓄されている」¹¹⁾にすぎないのに対し、ラトケの普遍文法では次のように明確にその区別が表明されている。

純正な言語の特徴には、普遍的な (gemein) ものと個別的な (sonderbar) ものとの2種類がある。／普遍の特徴は、すべての純正な言語のなかに見いだされるところのものである。／普遍の特徴には、類似性〔規則性〕と非類似性〔不規則性〕との2種類がある。[...]／言語の個別の特徴とは、それぞれの言語が固有にもっているものである。／〔従って〕文法は、普遍的な文法と個別的な文法とに分けられる。／普遍文法とは、すべての言語に役立つものである。(第1章；Ising, II, S. 26f.)

実際の記述は、例えば「前置詞」には分離するものと分離しないものがある(第15章)とか、語の配列には「一致」と「支配」とがある(第18章)というような、非常に古典的伝統的な文法内容である。ラトケは、ただ「～とはなにか。それは、～の2つだ」式の問答を繰り返す、文法概念の定義を教えるだけであり、しかもその定義は、「過去とは、それでもってなにか過去の事柄が意味されるものである」(Ising, II, S. 31)のように、しばしばトートロジー的である。実際に生徒にわかりやすいようにという配慮の跡は、見て取ることができない。

1.2.2. このラトケの『普遍文法』が出たのと同じ年に、ラトケの教授法の研究と実績に係わってきたヘルヴィヒによる普遍文法も出版された。ヘルヴィヒは1617年に死去したが、学校用教科書として公刊予定であった一連の文法書が、1619年に遺族の手により公刊されたのである。それが『ドイツ語で書かれた文法：I. すべての言語に共通するものを扱う普遍文法，II. ラテン語文法，III. ヘブライ語文法』(〈Sprachkünste: I. Allgemeine, welche das jenige so allen Sprachen gemein ist, in sich begriff, II. Lateinische, III. Hebraische, Deutsch beschrieben.〉: Gießen 1619年)である。このヘルヴィヒの『普遍文法』には、ドイツ語版とラテン語版(〈Libri Didactici, Grammaticae Vniversalis, Latinae, Graecae, Hebraicae, Chaldaicae.〉)とがあるが、ドイツ語版のほうが最終的版であると考えられ、実例も多く挙げられているので、ドイツ語版に基づいて論じたい。

ヘルヴィヒの『普遍文法』は16ページからなる2部構成で、「語の区別」つまり品詞論を扱う第1部と「語をいかにして配列し、意味ある話とするか」つまり統語論を扱う第2部とからなる。正書法と正音法(Prosodie)は、個別文法にまかせている。まず、序言を見よう：

今までそして今も学校では、文法が青少年たちに、生まれついて授かった言語でではなくて、ラテン語で [...] 講義され、青少年たちの側に相当な混乱、疲労、諦めを招いている。[...] そのような取り返しのつかない損失をなくすために、わがクリストフ・ヘルヴィヒは、[...] 初学者のために文法をわれらのドイツ語のなかへ置き、そしてよく一致している調和のなかへ

置いた。この文法では、学校に入ったばかりの青少年にとっては不必要であるおびただしい数にのぼる定義は、教師が口頭で説明するほうがはるかに簡単で有益であるので、取り去られ、昔からの不確かな規則は排除して、その代わりに確実な規則が入れられている。[...] 青少年が、簡単に短期間に言語を理解でき、それによって次に自由な学芸と勉学ができるようになれば、それは望ましいことだ。(Helwig, 1619, <Vorrede>, Bl. A. iir -A iiir)

ここで、母語で文法を理解させて言語習得を効率的にするという目的が述べられている点は、ラトケと同じであるが、わかりやすさを第一にして、不必要な定義や不確かな規則を切り捨てる決意を行なっている点がラトケと大きく異なっている。しかもこの決意は、実行されている。例えば、「動詞には、法と時間という2つの属性がある。この法と時間とがなにであるかは、記述からよりも実例から見て取ったほうがよい」(S. 8)。格、比較変化、法という文法カテゴリーを、「第1格」、「第2級」、「第3法」のように、序数で命名していることも目立つ。また、実際に事例を挙げているのも、生徒にも分かりやすいようにという配慮からである。さらには、比較変化は「ヘブライ語、カルディア語、シリア語はしないが、違った方法でそれに代えている」というように、単に一般化だけでなく言語間の相違にも触れている。そもそも、ヘルヴィヒはラトケを知る前から、ラトケ的な教育法の改革の必要性を意識しており、1608年の『ヘブライ語文法』はすでにできる限り簡潔に実際的に表現することを実践していたという¹²⁾。

未知の言語の文法を学ぶ際に、既知の基本的文法との相違を教わることが重要であることは、コメニウスの指摘するところでもある。「どの国民の青少年でもおかまいなしに同じ文法規則を使って教えるのも、これまた正しいやり方からはずれています。これらの国語はそれぞれ、ラテン語にたいして特殊なある程度独特な関係を持っているのですから、[...] 当然この関係をはっきりさせてやらなくてはならないはずです」(『大教授学』、第1巻、S. 179)。つまり、ラテン語文法をラテン語文法の側から見るのではなくて、母語の文法の側から見るのである。「新しく学ぶ言語の公式は、既知の言語を基準にして書いてほしい、両者の差別だけが明らかになるように」(『大教授学』第2巻、S. 34)。

1.3. 言語の論理的説明

中世スコラの思弁的な文法理論は、ポール・ロワイヤル文法の先駆とされる16世紀のスカリゲル(J. C. Scaliger: 1484-1558年)とサンクティウス(F. Sanctius: 1554-1628年)の哲学的文法を通じて、17世紀まで影響力をもっていた。スカリゲルは『ラテン語の根拠について』(<De causis linguae latinae>: Lyon 1540年)のなかで、ラテン語を素材としながら言語現象と言語カテゴリー一般を論理的に説明し、「言語の根拠」を示そうとしたし、サンクティウスも『ミネルヴァ、もしくはラテン語の根拠について』(<Minerva, seu de causis linguae latinae>: Madrid 1585年; Amsterdam 1587年)において、「言語の性質についての非常に洗練された興味深い洞察、[...] とりわけ心理学

に関連するような言語に関する一般的観察¹³⁾を行ない、言語に見られるさまざまな理性の痕跡を掘り起こして、言語の理法を明らかにしようとしたのである¹⁴⁾。

すでにアリストテレスが「オノマ」、「レーマ」、「シュンデスモス」（つなぎことば）を区別し、スコラ文法が質料（Materia）である「名詞」、「動詞」と、形相（Forma）である「共義詞」（synkategoremata ないし consignantia）とを区別し、サンクテウスもこの3品詞論を設定していたが、ヘルヴィヒも普遍的な品詞として、「名詞」、「動詞」、「副次詞」（<Beiwort>）という3種類を設定した（前2者は、文を作るとき基礎であるので「主要詞」（<Heubtwort>）と呼ばれる¹⁵⁾）。またヘルヴィヒが、動詞の種類に「能動動詞」と「受動動詞」の2つを区別したあと、「存在動詞」コブラをなかば独立的に挙げている点（S. 10）や、音声と語彙に関する論を文法から除外している点（ラテン語版，S. 16）も、論理的な文法論との関連性を見せている。スコラの論理的言語論では、命題をつくるコブラは重要であったし、音声についての論は物理学的ないし生理学の対象と考えられ、語彙は文法以外の部門で扱われるべきだと考えられたのである¹⁶⁾。さらには、ヘルヴィヒの話（sermo）と語（vox）の定義も、アリストテレス的でスコラ文法を想起させるものである¹⁷⁾。

話とは、語を用いて心の概念をしるすもの（もしくは、語を口で発するか文字で書くことによって魂を指し示すもの）で、語とは、（口で発せられるか文字で書かれるかして）心の概念を個別にしるし表現するものである。語の材質は調音された音声であり、語の機能は意味である。語の意味は人間たちによって異なった仕方であり決められたが故に、言語は異なっており、互いに多かれ少なかれ相違している。（Helwig, 1619, ラテン語版，S. 14）

このように、ヘルヴィヒは論理的・思弁的な文法の系列に結びつく箇所が少なくないのに対し、ラトケの『普遍文法』には、この系列に結びつくような観点はない。イエリネックは、普遍文法の全体がスコラ的文法の継続物だと見ているが¹⁸⁾、ラトケの『普遍文法』のように、純粋に教育学的意図だけに包まれた普遍文法もあったのである。また、ヘルヴィヒといえども、言語のなかの理法を説明する意図はない¹⁹⁾。

2. 調和のなかの方法

2.1. 信仰と自然と言語の調和

ラトケの教授法が効率的であるのは、単に母語を出発点に置いているからではなく、もっと大きな根拠がそこにはある。つまり、それまでの丸暗記を強いる機械的で非体系的な教授法から、「すべてが自然の秩序もしくは流れに従った」（第2条目）教授法へと意識的に変革がなされたのである²⁰⁾。なにが生徒の精神にとっては自然な流れであり、またなにが事物と事物とをつなぐ自然な秩

序であるのかを十分に考慮することによってこそ、生徒は「まったくの短期間に容易に」(『建白書』)学習ができる。そのために、帰納的な手順と調和とが要請されることになる。「経験を通じてすべてをひとつひとつ取り調べて」(第10条目)、具体から抽象へ、既知から未知へ、一般から特殊へと帰納的に、しかも「同じことをしばしば繰り返して」(第4条目)生徒に体得させる。理由(ratio)がなければ権威(auctoritas)の言うことも通用しないし、古くからの慣用(vetustas)も頼りにはならない(第10条目-1, 2)。まずは当該言語を十分に読み込んでそれに慣れてから(第9条目-1)、文法は教授される。「まず母語を」(第6条目)教えるのも、既知から未知へ自然に進むという原則に従ったものである。次に、「すべてにおいて同形性(Gleichförmigkeit)が」(第8条目)求められるが、これは、形式の違いによって生徒側が混乱するのを避けて、内容の理解をはかどらせようとするものである。普遍文法と各個別文法が、同じ文法的枠組みのなかで書かれたのもこの原理に基づいている。

したがって、ラトケが口にする「信仰と自然と諸言語の真なる調和」とは²¹⁾、教授法がキリスト教的な教えと一致し、生徒にとっても事物にとっても自然であり、そしてさらには、言語が表面的には多様に見えるにもかかわらず、すべての言語に神の意思の故に普遍性という秩序が内在していることを、指しているものと思われる。

2.2. 語と事物との一致

コメニウスの教授学も、「事物のいちばん奥底にあるゆるぎない自然に基づいて」(『大教授学』, 第1巻, S. 20f.) いる教授法であるからこそ、「あらゆる人にあらゆる事柄を教授する普遍的な技法」(『大教授学』, 第1巻, S. 20) であり得、生徒は「確実に」, 「容易に」, 「楽しく」学べるのである。17世紀後半に聖書について最もヨーロッパに普及したものと言われるほどに同時代によく知られた『開かれた言語の扉』(<Janua linguarum reserata>: Leszno 1631年[初版]; Danzig 1633年[第2版])のなかで²²⁾、コメニウスは言う：

言語を教える正しい本来の方法が、学校において今まで十分には認識されていなかったことは、今の現状を見れば明かである。勉学に志しを抱いた者のたいていは、語彙を習得するために年老いてしまった。すなわち、ラテン語だけに10年そしてそれ以上の年月、あるいは一生涯を使い果たし、なおその労苦は無駄に終わっている。[...] 青少年は、際限ないほどに詳しくて混乱したわかりにくい文法規則、たいていの場合は不必要である文法規則に、何年か足止めされる。[...] そのあとで、同じ年月以上かかって、青少年は事物[が示されること]なしに事物の名前を詰め込まれる。[...] 語は事物のしるしなのである。事物が知られずして語はなにを表示しているというのか。例えば、ある子供が千の千倍の数の語を言うことができながら、それが示す事物をわがものとできないとすれば、そのような蓄えを準備することは、いったいどのような役に立つのであろうか。(Comenius, 1642, B1.)(5^v-6^v)

語を単に丸暗記させるのではなく、それらが実生活とどう関連しているのかを教えつつ、言語を教えるというのである²³⁾。「知性と言語とは平行しており、理解した事項の数だけを、人は口にすることができる」(序言, B1.)(5^v)のであるから、言語に関する教育と事物に関する教育とが同時進行すべきなのである。『開かれた言語の扉』の副題も「すべての言語とすべての学問の苗床。すなわち、学問と学芸とともにラテン語およびその他のどの言語をも、あまねく学ぶための簡潔で長所の多い方法。百箇の項目と千箇の文章のもとにまとめた。」である。そもそも事物は「ばらばらでは存在しなければ認識もされない」(『大教授学』, 第2巻, S. 31)が、事物界における特定の事物の位置価値を表現するのは、語自体ではなく、主語と述語の関係をもった語と語からなる文章である²⁴⁾。だから、『開かれた言語の扉』では、「それぞれの言葉は文章に構成され、また同時に事物の構造を表わして」(『大教授学』, 第2巻, S. 31)いる。『開かれた言語の扉』は、「宇宙の生成」から始まって、自然界、技術界、社会、教育・学問界、宗教界に属する約「百箇の項目」を扱う「千箇の文章」のなかに、事物界を連関的に表示している²⁵⁾。この順序で事物界を理解しつつ、最終的には「およそ8000の単語」(序言, B1.)(5^v)が覚えられる。しかも、同じページのなかで「ラテン語の横に母語を添える」(B1.)(6^{vf.})という配慮で、母語を比較の手だてとして用いることが可能となり、より分かりやすく学習できる²⁶⁾。以上のような確固たる自然な方法で学習してこそ、「事物というしっかりした支柱をもつ言語の扉を、語彙というちやうつがいを軽く動かしはすして、文法というあらかじめ用意された鍵で即座に開くことができる」(序言, B1.)(7^{vf.})のである。

コメニウスが、無限で多様な事物界を千箇の文章という一体系のなかに表現しようとしたのは、まさにバロック的というべきであろう。「人間が調和をよろこび、しきりに調和を追い求めることは、明らかです」(『大学教授』, 第1巻, S. 75)と言うコメニウスは、まず大宇宙を考え、個々の事物はその大宇宙の鏡像であると見る。

この宇宙を、そのいちばん小さな部分にいたるまですべてを包んで、今ある姿に保っているもの [...], それは秩序以外のなにものでもなく, [...] さきにくる事物とあとにくる事物とが, 上にある事物と下にある事物とが, 大きな事物と小さな事物とが, 相似た事物と相似ない事物とが, その場所, 時間, 数, 尺度, および重さに応じ, それぞれの本性と調和にしたがって配置されている。(『大教授学』, 第1巻, S. 131)

したがって、「宇宙の調和にのっとり、また事物と言語とを一貫している共通な関係と脈絡とにのっとれば, [...] 一様性をもって教えることができるはずであります」(『大教授学』, 第1巻, S. 187)。自然と言語とには同形的関係があり、事物を正しく見てラヴェルを付けることが、いわば言語観察の第一歩である。現実世界の現象やその様態・動きは、すべての人間にとって同じであるから、それらと同形的である基本的な文法体系も本質的に同じであることになる。既述 (1.2.2.)

のようにコメニウスが、既知の基本的文法との相違を教えるだけで、未知の言語の文法は学べるとしたのも、この考え方から来ている。

3. ドイツ語のなかの普遍言語

3.1. 語の構造に見る普遍

3.1.1. ショッターリウス (Justus Georg Schottelius: 1612–1676年)²⁷⁾ が『ドイツ語文法』 (<Teutsche Sprachkunst>) を初めて公刊したのは、30年戦争の末期の1641年である。「序言」で、文典を著した意図が次のように語られている：

教会と学校、法律と司法、戦争と平和、商業と交易、行いと振舞い、これらすべてが、我々のところで保たれ、行われ、伝えられるのは、まさにドイツ語を通じてである。我々は、ドイツ語を通じて神と天へ向かう。そう、我々はドイツ語を通じて身体と魂とを得る。しかるに、青少年たちは母語の手ほどきを、いかにつましくおそまつにしか受けていないことか。[...] ひとつは、外国の言語を用いなければ、いかなる技芸、学問、知識にも近づくことができず、したがって最良の青少年期がただそのような言語の習得に費やされ、記憶のなかにはただいわば無内容という内容が詰め込まれ、理解力がのちに少しばかりついたところで、もう手遅れになってしまうのである。[...] 言語をその基礎にしたがって熟知するには、その言語が技法という形 [=文法] に置かれていなければならない。(Schottelius, 1641, Bl.): (3^v–4^v)

ここには、ラトケとコメニウスと同じ教育学的モチーフが見られるが、ショッターリウス自らが確固たる母語の文法を作り、それを青少年に呈示して見せようとしている点が大きく異なっている。上の引用文にある「ドイツ語を通じて神と天に向かう」とは、どう解釈すべきなのであろうか。ショッターリウスは、別の箇所で言う。

まったく完全な太初言語 (Ertzsprache) はアダムに与えられ、そしてアダムはこの言語ですべての事物をその正しい特性にしたがって命名した。この太初言語は、このとき [=バベルでの混乱] まではノアとその子孫たちが保ちつづけた。この唯一の万有言語 (Weltsprache) は、神の全能により [バベルで] 引き裂かれ、だいたいにされ、さまざまななまりに分断された結果、なまりどうしはお互いにまったく理解がなされなくなった。(Schottelius, 1641, S. 61)

この際に、69種類の「主幹言語」(<Hauptsprache>) が生じた (vgl. S. 62)。アダムの言語はこの時に消滅したのではなくヘブライ語して残存したとする当時一般的であった考えを、ショッターリウスは採らず、「ヘブライ語の起源は、今知られている他のすべての主幹言語と同様に、バベルでの

混乱より先に求めることはできない」(S. 57) とする説を支持している²⁸⁾。ドイツ語は、このバベルの言語混乱の際に生まれた「主幹言語」であり、ノアの子孫である「アシケナズが [...] ドイツ語をバベルから持ち込んで、この言語を自らの子孫たちを通してヨーロッパの国々に広めたのである」(S. 62f.)。ショッテリウスの考えでは、このドイツ語よりも古い言語はヨーロッパにはなく (vgl. S. 56f.)、ヨーロッパ諸語のなかでドイツ語が一番神に近く、「唯一普遍の言語」(die einige allgemeine Sprache: S. 62) に最も近いのである。バベルでドイツ語と同じように生じた残り68種類の言語にも、ドイツ語と同じ古さが認められるはずであるが、ショッテリウスはそのことにいっさい言及せず、つまるところドイツ語が唯一ヘブライ語と同じ古さの由緒ある言語だという断定をする。臨国のように国民文学が確立されていない当時のドイツにとって、まずは「歴史」に基づいて母語の卓越性を主張することが必要であったのである。

このように、始まりに「神の協力」(S. 84) があったドイツ語は、他のどの言語にもまして自然で本源的であり、(ヘブライ語と並んで) もっとも多くアダム言語の痕跡が見て取れる：「ドイツ語は自らのなかに何か神的なものをもっており、またそのような神性が文字 [= 音声] と個々の単語のなかに感ぜられ」(S. 39), 「ドイツ語の単語が最も本源的に」(S. 86) 事物を表現するのである。イッケルザーマー (V. Ickelsamer: 1500頃—1537頃) は、ドイツ語がアダム言語であることを「証明」しようとしたし、ベーメ (J. Böhme: 1575–1624年) は事物の本質は母語を通じてのみ見いだせると考えていた。次の引用文に言われている「言語」とは、まず第一にドイツ語のことである。

地上的なものはすべて、嵐のように過ぎ去りゆくが、[...] しかし言語のなかに、言語を真に熟知しそして言語を享受することのなかに、はるかに違ったもの、まったく天上的なものが潜んでいる。[...] まさに言語という手助けを通じてのみ、神は自らの意志を、永遠の偉大なる奥義を、また自然の事物の不可思議な本質を、そのほか人間の機知によって見いだされて技芸とか学問と称せられているものすべてを、われわれ人間にこれほど豊かに知らしめるのである。[...] 神はいわば、すべての自然を言語という技法によって囲い込んだのであり、そう言語は自然のすべての奥義のなかを通りぬけたものである。したがって、真に言語を熟知した者は、それにより同時に自然のなかを歩みめぐり、諸技芸を正しく起こし、諸学問をつまびらかにし、過去そして現今のすべての著名な人物たちと語り、そう神自身と語りじっくり話すことができる。(Schottelius, 1641, S. 105f.)

自然の奥義を言い表すことのなかに、言語の意義がある。これは、バロック文学によく見られるモチーフでもある。

3.1.2. 言語は、いわば宇宙の秩序のなかに形づくられており、一種の永遠なる自然であり、言語が神と自然と人間の間に関係を生み出す²⁹⁾。そしてその言語は樹木のような有機的な構造物

〈Kunstgewächs〉: S. 99) であり、その樹木を構成する要素が語である。イッセルザーマーやペーメが音声を言語の基礎と見たのに対し、ショッターリウスは語を言語の基礎と見た³⁰⁾。語と事物のあいだに神による予定調和のようなものがあるとすれば、語を明らかにすることが、事物・自然を明らかにすることである。つまり、宇宙の構造を反映するような自然性、合理性が、もし語のなかに見いだせれば、その言語はまさに完全である。コメニウスが語と語の関係を見ようとしたのに対し、ショッターリウスは語の内部の仕組みを観察する。そして、語根（これをたいていの場合、〈Stammwort〉と呼んでいる）が語の中核をなしていることを確認する。ドイツ語の語根が「その数が数千にまで延び、どの言語にも劣りはせず、まさり」(S. 93)、しかも「最も本源的に事物の特性を表現する」(S. 645) ことが証明できれば、全体としての言語の卓越性が証明できる。この語根の自然性は、例えば、〈der Ochse Bölcket, der Sperling silcket und zircket〉などという場合、その動詞のなかに「最も内なる特性」(Schottelius 1643, S. 81) が写し取られており、s という音声には「剣の輝きと光とが鋭く近づいて来る様子」(Schottelius, 1641, S. 91) が写し取られていることから証明しようとする。しかしよく見ると、このような例は、実際には単に音の模写ないし印象にすぎず、事物の本質などを写し取ってはいないと指摘することができよう。その限りにおいてショッターリウスは、ドイツ語の自然性、合理性、ないし宇宙との関連性を、なんら深い本質的なレベルで証明したことにならないであろう。

しかしながら、ショッターリウスは、さらに語の構造そのもののなかに、この宇宙との関連を見取ろうとし、語構造の秩序を分析するのである。すなわち、「語根」、「派生の主要語尾」(〈Hauptendung der Abgeleiteten〉: Schottelius, 1641, S. 100)、そして語の屈折を表わす「偶性語尾」(〈zufällige Endung〉: S. 102) という3つの構成要素がドイツ語の語を規則的に構成し、しかもこの3要素はすべて1音節である。このような類比的な規則性・合理性を、ショッターリウスは「根本的規則性」(〈Grundrichtigkeit〉)とよぶ³¹⁾。これを言語の本来の姿、言語の普遍的な構造とショッターリウスは考える。言語という樹木は、このような要素から規則的に組み合されて、形成されるのである。太初のドイツ語はこの〈Grundrichtigkeit〉を完全に呈示していたが、時間とともに隠されてしまったのだと考えるショッターリウスは、この〈Grundrichtigkeit〉を、「普遍性」を再び見い出すことを自らの使命と考えている。

3.2. テセイとピュセイ

3.2.1. ショッターリウスがドイツ語の音響模写能力の高さを賞賛したことを受けて、音響絵画(Klangmalerei) という手法を实践において追及し、「音響絵画を1つの確たる詩のジャンルにまで仕立て上げた第一人者」³²⁾ となったのは、ハスデルフェー (G. Ph. Harsdörffer: 1607-1658年) である。ハスデルフェーにとって音響絵画とは、「意味があろうがなかろうが、似た音響を機械的に連ねることであり、ただのテクニクで、遊びであり」³³⁾、皮相な擬声語の追求である³⁴⁾。言語理論に関して、ハスデルフェーは「ほとんど奴隷のように」³⁵⁾ ショッターリウスに依拠してい

という。例えば、『ドイツ語に関する研究のための、そしてそれに従事する人のための擁護の書』(〈Schutzschrift für Die Teutsche Spracharbeit und Derselbe Beflissene〉: 1644年)³⁶⁾には、次のような一節がある。

ドイツ語は、すべての音響を [...] うまく聞き取れるようにして言い表して、自然の舌で語る。
[...] 自ら音を立てるすべての事物において、自然が語るのは我々のドイツ語である。したがって、次のように主張しようとした者もいる。すなわち、原初の人間アダムは、あらかじめ備わっている音によって自らを表わすどの[事物の]特性をも、自然にしたがって言い表したのであるから、アダムは大地の家禽そして獣に、ほかならない我々の[ドイツ語の]語でのみ名を与えることができたはずだと。したがって、我々のもっている語根の大部分が、あの神聖な言語 [=ヘブライ語] と同じ音をしていることは、驚くべきことではない。[...] このあたりのことについては、探求者 [=シュッターリウス] が『ドイツ語文法』の「賛辞」のなかで、格調高く詳論している。(Harsdörffer, 1644, S. 12-14)

この引用部で、ハルスデルファーが語と事物との間には本源的で必然的な関係があるとする考え方を、つまり一般にプラトンに代表されるピュセイ説(自然説)を採っているのは、明かであろう。シュッターリウスも、既述のこと(3.1.)で明白のようにピュセイ説を採っている。しかし、道旗泰三氏も指摘するように、ハルスデルファーは別の箇所では、語と事物との関係は人為的に取り決められたのだとするアリストテレスに代表されるテセイ説(契約説)を採るという「矛盾」³⁷⁾を見せている。次の引用箇所は、1.3.でアリストテレス的だとして引用したヘルヴィヒの話と語の定義と酷似していて、テセイ説の考え方がもっともはっきり主張されている。

文字が我々の語の写し絵であるのとおなじく、語は我々の思考の写し絵である。語の意味は、人間の取り決めにより導かれた。その取り決め方は多様であったため、語が多くの言語においてまったくちがった意味を持っている(Harsdörffer, 1645, S. 3)

この「矛盾」を道旗氏は、ハルスデルファーは「根本的考え方は [...] 人為発生説³⁸⁾を前提としている」³⁹⁾が、「音響絵画という1つの詩的技巧を徹底化するために謂わば理論上の口実として自然発生説に依拠しそれを援用した」⁴⁰⁾と解釈している。一方カイザーは、ハルスデルファーは「言語一般に対してテセイ説を採っている」⁴¹⁾が、ドイツ語の「自然性」ないし「卓越性を証明する」⁴²⁾ために、ピュセイ説に基づく音響絵画という技法が必要であったと解釈している。筆者は、この時代にはまずもってドイツ語を擁護し頭揚することが、ハルスデルファーの言語観をもっとも根幹的に形成するものであったと見て、カイザーの解釈に近い立場を採りたい。つまり、ハルスデルファーは言語一般に対してはテセイ説を、一方アダムの言語とドイツ語に対してはそれらがいわ

ば他の言語とは別格的であるがゆえにピュセイ説を採るという、意識的な使いわけを行なったと見る。これは、あくまでも「使い分け」であってけっして「矛盾」ではない。ショッテリウスと同様に、ドイツ語をアダムの普遍的言語にもっとも近い言語、ないし唯一的に神の協力のあった言語と解釈するならば、この使い分けはそこからくる当然の帰結である。ドイツ語は、他の言語とは超越的に異なり、違った見方が必要なのである。

3.2.2. ライプニッツ (G. W. Leibniz: 1646–1716年) は、「語もやはり、何人かが考えているほどに恣意的ないし偶然的ではなく」(〈Unvorgreifliche Gedanken〉, § 50), ただ我々が個々の語がなぜそのような意味を持つのかの理由を知らないだけだと述べている。また、別のところでも、次のように言われている。

言葉の意味は恣意的であると学院や他の至るところで言われるのが常であることは知っています。そして確かに言葉の意味は自然的必然性によって決められる訳ではありませんが、偶然が関わりを持つところでは自然的理由によって、選択が関与しているところでは道徳的理由によって、とにかく決定されるに違いありません。すべて選択により、全く恣意的であるような人工的な言語も恐らくありましょう。[...] しかし、既に知られている言語から作り出されたということが分っている言語は、その前提としている言語の内の自然なところや偶然的なところと選択とが混ざっています。(『人間知性新論』, S. 264)

原初のアダムの言語においては、文節音と観念との間に「自然的な連結」(『人間知性新論』, S. 263) があり、つねに語と事物とは一致し、予定調和があった。この「ただ一つの言語」(S. 263) から、他のすべての言語は「派生」(S. 267) し、普遍的な「調和」(S. 272) のなかにあることの証明は、動物の鳴き声や擬声語の例で示される。たとえば、ラテン語の *coaxare* (ケロケロ鳴く) とドイツ語の *quaken* との関連性、「R という文字が激しい動きとこの文字のような噪音を意味する」(S. 268) ことや、「L という文字はもっと穏やかな動きをしめ」(S. 268) すことが、挙げられている。ライプニッツは、もちろんこのようなことの不確かさは意識してはいた。そして、アダムの言語の有していた自然さの痕跡を最も多く保存しているのは、ドイツ語だと考えた。

たとえヘブライ語ないしアラビア語が原始的言語に一番近いとしても、それはかなり変わってしまっている筈であり、チュートン語 [=ドイツ語]の方が自然なものを、そして(ヤコブ・ペーメの言葉を使えば) アダムの言語を、より多く保存しているように思えます。(『人間知性新論』, S. 266f)

例えば、ドイツ語の w 音に「行き来する動きをもたらす」(〈Unvorgreifliche Gedanken〉, § 49) 自然さの痕跡を見ている。ドイツ語がヘブライ語よりも起源に近いとする点で、ライプニッツはべ

カヌス (J. G. Becanus: 1518-1872年) の説を正しいとしている⁴³⁾。以上のように、ライプニッツは言語の起源に関して、ショッテリウスとハルスデルファーと類似した考え方を示している。

4. 新たな創造のなかの普遍言語

4.1. 組み合わせの創造性

4.1.1. 言語という木が、3つの語構成要素を規則的に組み合わせることで形成されるというショッテリウスの考え方は、16世紀末に初めて著作が印刷されて以来多くの者に取り上げられていたルルス (Raymundus Lullus: 1235-1315年) の「組み合わせ術」(ars combinatoria) との類似性を感じさせる。ルルスは、B から K までの9つのアルファベートに、それぞれ9つの絶対的原理、相対的原理、問い、主題、美德、悪徳を当てた。例えば、B は、善、差異、〜かどうか、神、正義、貪欲を表わし、F は、英知、中間、どれほど、想像力、進行、怠惰を表わす⁴⁴⁾。この9つのアルファベートを組み合わせることによって、すべての概念が表わせるような一種の哲学的言語を作ろうとした。神が天地創造の際に組み合わせ術を用いたのであるから⁴⁵⁾、この組み合わせにより「真理を探求できる」(『アルス・ブレウィス』, S. 71) というのである。ショッテリウスの木というメタファーは、ルルスにも見られ、組み合わせ原理を木の形でも示している⁴⁶⁾。

ショッテリウスの場合、多様な世界と有限個の語根とをうまく結びつける原理が、造語のメカニズムである。語根とこのメカニズムの両方を知る者が、言語全体を獲得できるのである。「自然において個々の事物の数がほとんど無限であるため、[特定の事物を表わすべき] 単一の語根が存在しない場合に」(Schottelius, 1641, S. 94), 「語根はつねに、派生語と合成語に協力の手を差しのべてもらわねばならない。」(S. 107)。派生と合成という操作によって有限個の語根から理論的に無限個のさまざまな事物を表わす語が生まれるわけである。この創造性ないし生成性は、ポール・ロワイヤル文法が「二十五ないし三十の音声で語に無限の多様性をつくり出すことのすばらしい発明」(『ポール・ロワイヤル文法』, S. 33) を、人間が理性を有する最大の証拠のひとつとしていることを思い出させ、また形態論のレヴェルにとどまっているとはいえ、チョムスキーの生成理論との平行性も想起させる。

形態論ないし造語論を中心に位置づけるショッテリウスの言語論においては、語根と語根を組み合わせる合成法がもっともダイナミックな組み合わせ法である。ショッテリウスは、さまざまな語根をさまざまに合成することで「何百種類もの色彩」(Schottelius, 1641, S. 121) が表現されることを例証し、Oberberghauptmann や Biederhandwercksleute のような (S. 115) 多くの語根からなる合成語を好んで示した。また、Weinfaß と Faßwein のように (S. 118), 同じ要素どうしであっても位置の交換によって全体の意味が大きく変わることや, sawrsüß, frewdenpein (S. 117) のように、反意関係にある要素どうしが合成されて、今までにない「ひとの目にとまる格別な意味」(S. 573) が表わせることを好んで指摘した。つまり、合成語内部での要素相互の關係に注目して

いるわけである。したがって、ショッテリウスの念頭にある語根どうしの結合とは、句という単位を作り出す結合ではなく、ほとんど第1義的に合成語を作り出す結合であったと思われる。そのため、ショッテリウスが句レベルの語順に関して発言するのは、ほんのごくわずかとなっている。付加形容詞は名詞の前に置くべきだという規則は、そのようなわずかな発言のひとつであるが、この規則もよく見ると、合成語内における要素の配列の規則から引き出されている。つまり、例えば *Lobrede* という合成語における *Rede* という「主要な意味」(S. 108) を担う「基礎語」(S. 112) が、「わがドイツ語の自然な特性からして、いちばん最後まで、いわば意味が完結するところまで、言わずに取っておかねばならない」(S. 113) のと同様に、*eine Stadt berühmt* ではなくて、*eine berühmte Stadt* と言わねばならないと説明している。また、*die hohe Noht und Gefahr, welche vor Augen schwebet* と関係文で言うよりも、*die hohe vor Augen schwebende Noht und Gefahr* と言ったほうがよいとしているのも、「簡潔におごそかに」(S. 571) 言えることのほかに、今のような合成語内の配列から引き出された修飾語＋被修飾語という OV 的な語順規則と関係していると思われる。さらに、造語論の領域に入るはずの規則が「統語論」の章のなかに少なからず入り込んでいることも⁴⁷⁾、このようなショッテリウスの文法の手法から説明が可能であろう。つまり、西本美彦氏の指摘するように、ショッテリウスの場合、句レベルの結合と造語レベルの結合とに「明確な境界線はなく、むしろ彼はそれらの間に [...] 一体性を求めようとした」⁴⁸⁾ と言えよう。ただし、ショッテリウスが統語論のことを〈Wortfügung〉つまり「語の連結」と呼んだ限りにおいて、統語論が造語論レベルの語の連結を扱うものであっても、矛盾ではないのである。

4.1.2. ハルスデルファーも、例えば、*Erde* から *Rede* へと文字を並べ換えて「生じる言葉とものと言葉の関係の一種神秘的とでもいえる妙味」⁴⁹⁾ を推奨しているように、要素の組み合わせに対して大きな興味を抱いている。『数学と物理学の時間 第2部』(〈*Delitiae Mathematicae et Physicae. Der Mathematischen und Philosophischen Erquickstunden Zweyter Theil.*〉: 1651年) の第14課には、「ドイツ語の思考の5重の輪」(〈*Fünffacher Denckring der Teutschen Sprache*〉) が描かれている。これは、ルルス「組合せ術」にもみられるような同心円であり⁵⁰⁾、5つの輪を相互に廻してゆくと、それぞれの輪のなかにある要素と要素が組み合わせられ、すべての語を順々に作り出すことができるわけである。第1の輪に40種の前綴、第2の輪に50種の語頭文字 (st, m, gn, br など)、第3の輪に12種の間接文字 (i, eu, a など)、第4の輪に120種の最終文字 (z, rg, ng, kk など)、第5の輪に24種の後綴を置いている。意味を成さない組合せを、「空の音節」(〈*blinde Sylbe*〉) として除外した上で、このようにして得られた結果が、「完全なドイツ語の辞書を著わすための誤りようのない基準」となると説明している。できあがった語は、一般に流布しているかどうかは問わず、構造上正しいのであるから使用してよいとされる。この輪は、いわば辞書編纂と押韻技術のための器械にすぎず、これは「思考」の輪などからはほど遠い⁵¹⁾。この際、ショッテリウスの場合とは違い、ハルスデルファーの考える言語の構成要素は語根ではなくて文字であるように思われる。

4.2. 汎言語

コメニウスの場合にも、要素の組み合わせという原理がひとつの大きな役割を演じている。コメニウスの「汎知学」(〈Pansophie〉) という概念は、「学識の円環的形成全体」(tota Eruditionis Encyclopaedia) (『大教授学』, 第2巻, S. 95) つまり百科全書の獲得を約束する方法である。ちょうど言語においてわずかな数の音声から多様な語そして文が作り出せるのと同様に、世界もそのような仕組みでできているはずだと考えるのである。したがって、汎知学の第1の課題は、現実に存在するものすべてを数少ない最終的要素へ分析することであり、第2の課題は、逆にわずかな数の基本概念から結合により事物自体を獲得し、人間の精神を特定数の原理から構成することである⁵²⁾。

「人間は、大宇宙があまねく広げてみせるものをことごとくうちに秘めている宇宙の集約」(第1巻, S. 69), すなわち「小宇宙」(同所)なのである。ただし、汎知学の目的は単に諸現象の目録を作成することではなく、究極的には、あまねく行き渡っている調和を、神の啓示を論証することによって、人類を明るい光で照らし、人類の調和ないし平和、「人類全体の救い」(第1巻, S. 21)をもたらすことである⁵³⁾。人類の相互理解と平和をもたらすには、事物について語るための人類共通の普遍的言語を確立して、「バベルの塔」(第1巻, S. 179)に逆襲せねばならない。言語は、「学識を身につけ、これをほかの人々に伝達する手段」(第2巻, S. 30)である。コメニウスの汎知的改革にとって、アダムの言語のように事物を完全に表現する絶対的に合理的な普遍言語は、人類の意思疎通の手段として最高である。

コメニウスは1641年にイギリスに滞在したおりに、普遍言語を準備していたウィルキンズ (J. Wilkins) とダルガーノ (G. Dalgarno) を知り、それ以来、彼らの普遍言語の思想に非常に興味を持った。対数と微分法の発明によって動かされた時代に、合理的な世界語の追及が広まっていたのは驚くには値しないであろう。『光の道』(〈Via lucis〉: 1641-42年に執筆; 1668年に公刊)のなかでコメニウスは、漢字という記号が、言語の異なる人どうしの相互理解を可能にしていることを引合いに出して、「合理的手続きを用いて、巧妙で洗練され、有害な混乱を克服することができると思われる唯一の言語を理解する」⁵⁴⁾ ことの必要性を述べた。不規則性が多くて学習が困難なラテン語の代わりに、合理的で完全に規則的な世界語を創る必要があると意識したのであり、それには、すべての言語のなかから最良のものを集める方法と、まったく新しく事物に従って作り上げる方法とがあると考えた⁵⁵⁾。人類全体に理性の光が差し込むのに最大の障害となっているのが、諸言語の相違であるとしたのである。

『言語の最新の方法』(〈Novissima Linguarum Methodus〉: 1644-47年に執筆; 1647年に公刊)のなかでは、ラテン語がその世界的地位からして一応国境を越えて文化交流を行なう手段となり得ると考えたが、しかし、ラテン語と事物との必然的関係をコメニウスは疑い始めていた⁵⁶⁾。そこで、ラテン語に代わる、語と事物との明確な対応に基づく合理的な構造を有する完全な言語を構成するには、1) 事物の完全かつ普遍的な目録 (Nomenklatur), 2) 完全な辞書 (Lexikon), そして 3)

文法という道具が必要であると考えた。かつてアダムは事物の本質に根ざした名を与えたが、人類がその目録を破壊してしまったいま、言語と事物が平行的な関係にある「事物の目録」を作らねばならない。それは、自然物、人工物、道徳、精神から構成される。この考え方は、『可観界図示（世界図絵）』（<Orbis sensualium pictus>: 1653-54年に執筆；1658年に公刊）のなかで、実現されている。完全な辞書とはこの目録のインデックスのことであり、目録が事項に従って構成されるのに対し、辞書では語に従って構成される。辞書での記載は語のアルファベット順だが、派生語と合成語はその語根のもとへ入れることや、自国語か外来語か、単一義か、多義か、本来的意味か、派生的意味かなどを言う必要もあるとしている。文法は、音、音節、語を作り、語と語を結び付けて談話を作る規則を確定するものであり、語と語との結びつきの研究は、コメニウスにとっては事物の目録を入念に仕上げることに基づいて成される⁵⁷⁾。

さらに、『汎言語』（<Panglottia>: 1643-48年に執筆；1966年[sic!]に公刊）においては、完全な普遍言語・世界言語を創造して、アダムの言語を取り戻す方法がさらに具体的に考えられた。コメニウスにとって、現実に存在する言語が非合理的であることは信じがたいことであったにちがいない。例外がなく、誤解がありえないような言語とするために、200ないし300個の単音節の語根とその派生語から成る語彙体系を考えた。例えば、語根 *hom*（人間）に接尾辞を付けて、*home*（幼年）、*homi*（少年）、*homei*（若年）、*homa*（青年）、*homu*（壮年）のような関連性を持つ一連の語を造るのである。語における調和は、語根からの規則的な派生という方法で語が造られる限りにおいて保証された。また、名詞と動詞とが同じ語根から形成され、形容詞は不要で、意味を有さない記号も存在せず、同義語もない⁵⁸⁾。その際に、コメニウスには哲学的意図があったのではなく、教育的意図、世界改良の意図があったのである⁵⁹⁾。

4.3. 普遍的記号言語

ライプニッツは、『結合法論』（<Dissertatio de Arte Combinatoria>: 1666年）のなかで、例えば「2」を「空間」、「3」を「介在者」、「10」を「全体」だとすると、「空間」は、「2・3・10」という組み合わせで、つまり「全体」「のなかで」得られる「空間」として表記が可能であることを述べている。そして、基本的因子の可能な組み合わせを確定することで、主語（主辞）に対する述語（賓辞）がすべて見いだせると考えている⁶⁰⁾。この『結合法論』の成立に最も重要な刺激を与えたのは、既述のハルスデルフェーの『数学と物理学の時間 第2部』であり、ライプニッツはとりわけあの「思考の5重の輪」を引用し⁶¹⁾、また次の例を借りている（Philosophische Schriften, 4. Bd., S. 88）：〈Ehr, Kunst, Geld, Guth, Lob, Weib und Kind./Man hat, sucht, fehlt, hofft und verschwind.〉。この詩では、どの動詞（述語）もがどの名詞（主語）とも組み合わせられるように語が選ばれており、どの動詞とどの名詞が組み合わせられるかによって、詩の意味が変わって行くのである⁶²⁾。

組み合わせに対する興味から出発して、ライプニッツは普遍的言語の創造に関心を寄せていった。ライプニッツにとって、言語はただ単にコミュニケーションに役立てられるだけでなく、人間が

思考するときの媒体であり、言語は認識のための手段である⁶³⁾。鏡というメタファーで、言語と思考との密接な関連を暗示している。したがって、ライプニッツが求める普遍的言語は、人間間の意志疎通に使われるにとどまらず、代数学のように確実な証明が可能で思考を助ける道具でありえる合理的な言語であり、発見術的な言語である。

人々は、ピタゴラス以来、最高の奥義が数字のなかに隠されていると確信してきた。[...] 奥義への真の鍵は知られていなかったのも、好奇心に満ちた人々は無駄な詮索・迷信に陥り、そこから俗流のカバラが生じてきたが、それは真のカバラからは程遠く、[...] カバラの本はそれらの愚劣なことで充ち満ちているのである。他方、驚くべき事項を数・記号によって見いだすことができるような新たな言語。或る人によってはアダム語と呼ばれたり、ヤコブ＝ベームによっては自然言語と呼ばれる、新たな言語を見いだすことができるのではないかと信じる傾向が人々の奥深いところに残った。(*「普遍記号言語」*, S. 110f.)

ライプニッツの言う「普遍記号学」(*Characteristica Universalis*)とは、「いわば〈人間思惟のアルファベット〉を見だし、このアルファベットの文字の結合と、アルファベットから作られる語の分析によって、総てのことを発見し判断する」(S. 114) 記号体系のことである。この普遍的記号言語は、基本概念の目録と普遍的文法、すなわち「人間思惟のアルファベット」の目録と、アルファベットを組み合わせる観念間の相互関係を表現する規則から成る。この目録に既存の真実が蓄えられ、またここから新たな真実が獲得できる⁶⁴⁾。

日常生活で起こるあらゆることを表現でき、しかも判断や発見をするのに役立つ普遍的言語は、「数記号をモデルとして案出することができる」(*「チルンハウスへの書簡」*, S. 44)。この基本概念を表わす記号は、表意的な漢字に似ていて⁶⁵⁾、「記号の考察は我々を事象の最奥部まで導いてくれる」(S. 44)。複合観念は基本観念(思考のアルファベット)へと分解される。例えば、運動という複合観念は、 $7 \times 5 = 35$ (7:変化, 5:場所)であり、人間は $2 \times 3 = 6$ (2:動物, 3:理性的)である⁶⁶⁾。すべてを基本的な概念(フレーゲの言う「概念記法」)に分析して、記号の構造を意味の構造と一致させて、語の意味内容を形式的に表記する方法は、生成文法によっても採られているし、今日一部には機械翻訳にも応用されている。このような記号が見いだせたならば、次の段階としてそれらを組み合わせる原理、統語論が必要になる。文法においては、基本形式へ還元するための一連の置き換えが行なわれる。表層構造から深層構造への変形規則との比較が可能であろう⁶⁷⁾。動詞はコブラ+名詞で、格是不変化詞+名詞で置き換えられる。このように、ライプニッツには思弁文法的な観点が多く見られ、品詞も名詞と動詞と小辞とに3分している⁶⁸⁾。

ラテン語に、現在ある言語と将来の普遍言語との仲介役を認めているライプニッツは⁶⁹⁾、屈折をなくして品詞を最小限に押えることによって、ラテン語を修正することも考えた。それによると、名詞には *res* (物) と *ens* (存在) のふたつ、動詞にはコブラのひとつだけを設定し、残りは形容詞

と小辞だけが存在する。例えば, *homo* (人) は *ens humanum* (人的な存在) に, *valde potito* (大いに飲む) は *sum magnus potator* (大いなる飲酒家である) に, *Petrus scribet* (ペトルスは書く) は *Petrus est scribens* (ペトルスは書くところにある) に置き換えられる。そして様態を示し悟性のさまざまな形式を認識させる小辞が, 重視される⁷⁰⁾。不規則性は, すべて取り除かれる。このような文法は, まさに置き換え規則の集合である⁷¹⁾。

5. 結

さて最後に, 17世紀の言語論において言語の普遍性へ通じる扉がどのような鍵で開かれようとしたかを, 以上の考察から整理してみたい。

ラトケとヘルヴィヒは, 『普遍文法』を著わすことによって, 一見言語の普遍性へ通じる扉を開けることのできる鍵を与えているように見えるが, 実際にはその文法は言語のなかに存在する普遍的な理法^{ラッホ}を説明する哲学的な鍵たろうとするものではなくて, 神のことばを全国民に知らしめるという宗教的目的の下に言語教育を効率化するための純粋に教育学的な「方法」であった。ラトケとヘルヴィヒにとって普遍言語はアダムが用いた過去のものであったと思われるのに対し, ショッターリウスはドイツ語という同時代の言語をアダムの言語に最も近い言語であると断定することによって, ドイツ語を通して普遍言語を垣間みようとしていると思われる。つまり, ここではドイツ語という言語が, とりわけその語構造が, 普遍性を読み取るための鍵となっている。この意味で, ショッターリウスの文法は, ドイツ語の普遍性を証明するための一種の普遍文法であったと言うことすら許されよう。他方ハルスデルファーにあっては, 関心はドイツ語から普遍性を読み取るのではなくて, 機械的に文字を組み合わせることによって語彙全体を把握することだと思われるが, この機械的な鍵では, 言語の表層部しか開けることができないのである。コメニウスにとって言語の普遍性の追求は人類全体の相互理解のために不可欠であり, それに至る鍵は, 事物界の構造を完全に理解することのなかにあり, 普遍言語は未来に築くべきものと捉えられた。同じく普遍言語の創造を考えたライプニッツにとっては, 人間の思惟の構造を分析することが言語の普遍性に至る鍵であったが, それはまた新たな思考の発見に至る「奥義への真の鍵」でもあったのである。

註

- 1) Rossi(1960), S. 12, 参照。
- 2) Schottelius (1641), S. 64f.
- 3) チェコ語版の『教授学』(1628-32年に執筆; 公刊は1849年)に修正と加筆を加えてラテン語で書かれた。
- 4) 以下, 原典からの引用の場合, 本論中にその出典箇所を示すことにする。なお, この鈴木氏の訳における句読法は独特なので, 適宜改めた。以下同じ。
- 5) この『建白書』は Ising によって復刻されている。本論文末にある文献一覧中の Ratke (1612) を参照。
- 6) 『大教授学』, 第2巻, 訳注, S. 173-175 参照。コメニウスはすでに1616年に, ラトケ的な方法で書いた『簡易な文法規則』(『Grammaticae facilioris praecepta』)をブラハで出版した。

- 7) この『報告書』は、Stötzner によって復刻されている。文献一覧中の Helwig/Jung (1613) を参照。
- 8) 以下、1614/15年にヘルヴィヒとユングがアウグスブルグでラトケに協力した際に共同執筆したとされる『ラトケの教授法が主として基づく [25の] 条目』(1617年) におもに依って、ラトケの教授法の概略を見ることにする。これは、Seiler によって翻刻されている。文献一覧中の Helwig/Jung (1617) を参照。以下、第何条目とあるのは、この著述のなかでの条目標番号を指す。
- 9) ドイツ語版が、Ising によって復刻されている。文献一覧中の Ratke (1619) を参照。
- 10) 煩雑さを避けるために、以下では答えの部分だけを引用することにする。
- 11) Chomsky (1967), 註95。
- 12) Vgl. Siebeck (1907), S. 297. ヘルヴィヒはラトケに出会うよりも前に、『普遍文法』に見られるような思想の多くをもっており、フィンク (Finck) との共著の <Latina Grammatica> (1607年) は多くの点ですでに、伝統的文法から離れているという。Vgl. Juntune (1985), Anm. 17.
- 13) Lakoff (1969), S. 357.
- 14) Vgl. Kristeva (1981), S. 231
- 15) 他面、この3品詞論はヘブライ語とも一致している。ロイヒリン (1455–1522年) は、『ヘブライ語の概要』(<De rudimentis hebraicis>) のなかで、「品詞には名詞と動詞と、共義詞という3種がある」と述べている：Arens (1974), S. 65f.
- 16) Kaltz (1978), S. 231.
- 17) アリストテレスは、次のように定義している：「ことばは、たましいの感情や印象の、声に出されたしるしもしくは記号であり、文字に書き表わされたことばは口に出されたことばの記号である。文字がそれぞれ異なるように、ことば自体もすべての種族にとって同じではない。」(Dinneen [1970], S. 96)。
- 18) Vgl. Jellinek (1913), S. 30.
- 19) コメニウスも、「言語の公式は、文法的であることが望ましく、哲学的であることは望ましくない」(『大教授学』, 第2巻, S. 34) としている。
- 20) ラトケの言語教授法についてさらに詳しくは、拙稿 (1986a), を参照。
- 21) 例えば、Ising に復刻されているラトケの手書きの <SchreibungsLehr>, <WortschickungsLehr>, <WortbedeutungsLehr> のタイトル中に言われている。
- 22) 以下では、1642年のラテン語・ドイツ語版 <Eröffnete Güldene SprachenThür> (Hamburg) に基づいて引用する。
- 23) 『大教授学』には、「用具の使い方は、言葉よりは事物で、いいかえれば、公式よりは実例で見せてやってほしい」(『大教授学』, 第2巻, S. 22) とある。
- 24) 堀内 (1970), S. 45f.
- 25) 詳しくは、堀内 (1984), S. 94f. 参照。
- 26) 初版はラテン語で書かれているが、第2版では、ラテン語とポーランド語とドイツ語の3ヶ国語で本文が併記されている。英語版、フランス語版、ドイツ語版なども、まもなく出された。既知の言語の文と習得すべき言語の文とを対置させて言語学習を容易にしようとする方法は、直接にはスペインで出された『言語の扉』(<Janua linguarum>: 1611年) にさかのぼる。ここでイエズス会の Bathe が、スペイン語の文とラテン語の文とを左右のページに対置させるという当時としては画期的な方法を用いた：vgl. Padley (1985), S. 339–341.
- 27) ショッターリウスに言語学的興味を呼び起こしたのは、ヘルヴィヒとともにラトケの教授学を研究したユングである。
- 28) ただし、『ドイツ語文法』の第2版 (1651年) 以降は、ヘブライ語を太初の言語とする説を採った。
- 29) Vgl. Hankamer, S. 138.
- 30) 語を第一に置く見方は、同時代のドイツ、オランダの文法家にも見られ、またコメニウスの原理のかなめでもあった。Gundolf (1930) は、ショッターリウスの <Wortbesessenheit> という言い方をしている (S. 72) .
- 31) ラテン語の *analogia* に対応するものとしてショッターリウスが造ったこの用語は、1645年以降には学識界

でかなり定着していた。『ドイツ語文法』の第2版(1651年)において、ショッテリウスはこの類比的な言語観を最も明確に打ち出した。vgl. 拙稿, (1985) の 3. 3.

- 32) 道旗 (1982), S. 122.
- 33) Narciss (1927), S. 68.
- 34) Vgl. Fricke (1933), S. 120.
- 35) Kayser (1932), S. 184; また Narciss (1927), S. 65 参照。
- 36) 『貴婦人閑話』(<Frauenzimmer Gesprächspiele>) 第1部(第2版)の付録として記載されている。
- 37) 道旗 (1982), S. 130.
- 38) テセイ説に同じ。
- 39) 道旗 (1982), S. 126.
- 40) 道旗 (1982), S. 132.
- 41) Kayser (1932), S. 178.
- 42) Kayser (1932), S. 183.
- 43) Vgl. Walker (1972), S. 301.
- 44) Lullus, 「アルス プレウィス」, S. 72 参照。また, Rossi (1960), S. 98-102 参照。
- 45) Vgl. Zeller (1974), S. 159f.
- 46) Vgl. Rossi (1960), S. 96f., また S. 99 および S. 263 の絵を参照。
- 47) 具体例に関しては, 西本 (1989), S. 45-47 を参照。
- 48) 西本 (1989), S. 49.
- 49) 道旗 (1982), S. 119.
- 50) Lullus, 「アルス プレウィス」, S. 82 参照。
- 51) Vgl. Zeller (1974), S. 166-168; Blume (1978) S. 215.
- 52) Vgl. Mahnke (1931), S. 272.
- 53) Vgl. Padley (1985), S. 342ff.; Bittner (1929), S. 127f.
- 54) Rossi (1960), S. 276 より引用。
- 55) Vgl. Geissler (1959), S. 151.
- 56) 堀内 (1970), S. 125, 参照。
- 57) Vgl. Helmer (1980), S. 526-530; Brekle (1975), S. 320f.
- 58) Vgl. Brekle (1975), S. 323f.
- 59) Vgl. Arens (1974), S. 94.
- 60) Rossi (1960), S. 312f. 参照。
- 61) Vgl. Neubauer (1978), S. 24; Mahnke (1931), S. 85.
- 62) Vgl. Zeller (1974), S. 174.
- 63) Vgl. Arens (1974), S. 103.
- 64) Zeller (1974), S. 181.
- 65) Vgl. Zeller (1974), S. 161. ライプニッツは, 中国語が哲学的言語ではないかと考え, もし漢字の構造を解く鍵が発見できれば, 思考の分析に役立つなにかが見いだせると考えた。
- 66) Verburg (1976), S. 602.
- 67) Lenders (1976), S. 587f. Brekle (1975), S. 305.
- 68) Vgl. Arens (1977), S. 362.
- 69) Rossi (1960), S. 319 参照。
- 70) Vgl. Huberti (1966), S. 369; Walker (1972), S. 297f.
- 71) Schmidt (1955), S. 660-662; Lenders (1976), S. 588.

文献一覧

原典

- Arnauld, A./C. Lancelot (1660) : *La Grammaire générale et raisonnée*. Paris. (『ポール・ロワイヤル文法』, 南館秀孝訳, 大修館書店, 1972年)
- Comenius, J. A. (1642) : *Eröffnete Güldene SprachenThür*. Hamburg.
- Comenius, J. A. (1657) : *Didactica Magna*. Amsterdam. (『大教授学』, 鈴木秀勇訳, 明治図書, 1973年)
- Comenius, J. A. (1658) : *Orbis sensualium pictus*. (『世界図絵』, 井ノ口淳夫訳, ミネルヴァ書房, 1988年) [1653-54年に執筆]
- Harsdörffer, G. Ph. (1644) : *Schutzschrift für Die Teutsche Spracharbeit und Derselben Beflissene*. In: Ders.: *Frauenzimmer Gesprächspiele*. 1. Tl., 2. Aufl. Nürnberg 1644. (Nachdruck: Tübingen 1968)
- Harsdörffer, G. Ph. (1645) : *Frauenzimmer Gesprächspiele*. 5. Tl. Nürnberg (Nachdruck: Tübingen 1968)
- Helwig, Ch. (1619) : *Sprachkünste*: I. Allgemeine, welche das jenige, so allen Sprachen gemein ist, in sich begriff, II. Lateinische, III. Hebraische, Teutsch beschrieben. Gießen. [ドイツ語版]
- Helwig, Ch. (1619) : *Libri Didactici, Grammaticae Vniversalis, Latinae, Graecae, Hebraicae, Chaldaicae*. Gießen. [ラテン語版]
- Helwig, Ch./J. Jung (1613) : *Kurtzer Bericht von der Didactica oder LehrKunst Wolfgangi Ratichii*. Frankfurt a. M. Nachdruck in: Stötzner, P. (Hg.) : *Ratichianische Schriften*. I. Leipzig 1892.
- Helwig, Ch./J. Jung (1617) : *Artickel, Auff welchen fürnehmlich die Ratichianische LehrKunst beruhet*. Nachdruck in: Seiler, K. (Hg.) : *Kleine pädagogische Schriften von Wolfgang Ratke*. Bad Heilbrunn 1967.
- Leibniz, G. W. (1717) : *Unvorgreiffliche Gedanken, betreffend die Ausübung und Verbesserung der deutschen Sprache*. Hannover. [Nachdruck: Stuttgart 1983] [1697年頃に執筆]
- Leibniz, G. W. (1765) : *Nouveaux essais sur l'entendement human*. (『人間知性新論』, 米山優訳, みすず書房, 1987年)
- Leibniz, G. W.: 「普遍的記号言語」, 山内史朗訳, In: 『哲学』 4, 哲学書房, 1988年。[Die philosophischen Schriften von G. W. Leibniz. Hg. v. C. J. Gerhardt. Berlin. 7. Bd., S. 184-189 に所収の論文の翻訳]
- Leibniz, G. W.: 「チルンハウスへの書簡」, 伊豆蔵好美訳, In: 『哲学』 1, 哲学書房, 1988年。
- Leibniz, G. W. (1880) : *Die philosophischen Schriften von G. W. Leibniz*. Hg. v. C. J. Gerhardt. Berlin. 4. Bd. [Nachdruck: Hildesheim 1960]
- Lullus, R.: *Ars Brevis*. (『アルス プレヴィス』, 山内史朗訳, In: 『哲学』 4, 哲学書房, 1988年。)
- Ratke, W. (1612) : *Memorial Welches zu Frankfurt Auff dem Wahltag Aö 1612. den 7. Maij dem teutschen Reich vbergeben*. Nachruck in: In: Ising, E.: *Wolfgang Ratkes Schriften zur deutschen Grammatik (1612-1630)*. Teil I. Berlin 1959.
- Ratke, W. (1619) : *Allgemeine Sprachlehr Nach der Lehrart Ratichii*. Köthen. Nachruck in: Ising, E.: a.a.O., Teil II.
- Schottelius, J. G. (1641) : *Teutsche Sprachkunst*. 1. Aufl. Braunschweig.
- Schottelius, J. G. (1643) : *Der Teutschen Sprach Einleitung*. Lüneburg.
- Schottelius, J. G. (1651) : *Teutsche Sprachkunst*. 2. Aufl. Braunschweig.

2次資料

- Arens, H. (1974) : *Sprachwissenschaft. Der Gang ihrer Entwicklung von der Antike bis zur Gegenwart*. 2 Bde. Frankfurt/M.
- Arens, H. (1977) : „Zur neueren Geschichtsschreibung der Linguistik.“ In: *Historiographia Linguistica*. 4.
- Bittner, K. (1929) : „J. A. Comenius und G. W. Leibniz.“ In: *Zeitschrift für slavische Philologie*. 6.
- Brekke, H. (1975) : „The seventeenth Century.“ In: *Historiography of Linguistics*. Hg. v. Th. A. Sebeok. (=Cur-

- rent Trends in Linguistics. 13.) The Hague.
- Blume, H. (1978) : „Sprachtheorie und Sprachlegitimation im 17. Jahrhundert in Schweden und in Kontinentaleuropa.“ In: Arkiv för Nordisk Filologi. 93.
- Chomsky, N. (1967) : Cartesian Linguistics: A Chapter in the History of Rationalist Thought. New York. (『デカルト派言語学』, 川本茂雄訳, テック, 1970年)
- Dinneen, F. P. (1970) : An Introduction to General Linguistics. Rinehart and Winston. (『一般言語学 言語理論の展開と現状』, 三宅鴻ほか訳, 大修館書店, 1973年)
- Fricke, G. (1933) : „Die Sprachauffassung in der grammatischen Theorie des 16. und 17. Jahrhunderts.“ In: Zeitschrift für deutsche Bildung. 9.
- Geissler, H. (1959) : Comenius und die Sprache. Heidelberg.
- Gundolf, F. (1930) : „J. G. Schottel.“ In: Deutschkundliches. F. Panzer zum 60. Geburtstage überreicht von Heidelberger Fachgenossen. Hg. v. H. Teske. Heidelberg.
- Helmer, K. (1980) : „Lexikographie bei Comenius.“ In: Pädagogische Rundschau. 34.
- 堀内 守 (1970) : 『コメニウス研究』, 福村出版。
- 堀内 守 (1984) : 『コメニウスとその時代』, 玉川大学出版部。
- Huberti, F. H. (1966) : „Leibnizens Sprachverständnis unter besonderer Berücksichtigung des III. Buches der <Neuen Untersuchungen über den Verstand>.“ In: Wirkendes Wort. 16.
- Jellinek, M. H. (1913) : Geschichte der neuhochdeutschen Grammatik. 1. Halbband. Heidelberg.
- Juntune, S. (1985) : „Ch. Helwig's Allgemeine Sprachkunst: One of the first universal Grammars.“ In: Rekonstruktion und Interpretation. Problemgeschichtliche Studien zur Sprachtheorie von Ockham bis Humblodt. Hg. v. K. D. Dutz/L. Kaczmarek. Tübingen.
- Kaltz, B. (1978) : „Christoph Helwig, ein vergessener Vertreter der allgemeinen Grammatik in Deutschland.“ In: Historiographia Linguistica. 5.
- Kayser, W. (1932) : Die Klangmalerei bei Harsdörffer. Ein Beitrag zur Geschichte der Literatur, Poetik und Sprachgeschichte der Barockzeit. Göttingen.
- Kristeva, J. (1981) : Le Language, cet inconnu. Paris. (『ことば, この未知なるもの — 記号論への招待 —』, 谷口勇/枝川昌雄訳, 国文社 1983年)
- Lakoff, R. (1969) : Review of Grammaire générale et raisonnée. In: Language. 5.
- Lenders, W. J. (1976) : „Kommunikation und Grammatik bei Leibniz.“ In: History of linguistic thought and contemporary linguistics. Hg. v. H. Parret. Berlin/New York.
- Mahnke, D. (1931) : „Der Barok-Universalisms des Comenius. II-1.“ In: Zeitschrift für Geschichte der Erziehung und des Unterrichts. 21.
- 道旗泰三 (1982) : 「オーピッツからハルスデルファーに至るドイツバロック言語観 — ドイツ17世紀形式的マニエリスムスの根底 —」, 『文化紀要』 (弘前大学教養部), 第16号。
- Narciss, G. A. (1927) : Studien zu den Frauenzimmergesprächspielen G. Ph. Harsdörfers (1607–1658) . Diss. Greifswald.
- Neubauer, J. (1978) : Symbolismus und symbolische Logik. Die Idee der ars combinatoria in der Entwicklung der modernen Dichtung. München.
- 西本美彦 (1989) : 「ドイツ統語理論研究史 (3)」, 『ドイツ文学研究』 (京都大学) 報告第34号。
- Padley, G. A. (1985) : Grammatical Theory in Western Europe 1500–1700. Trends in Vernacular Grammar I. Cambridge.
- Rossi, P. (1960) : Clavis universalis. Arti mnemoniche e logica combinatoria da Lullo a Leibniz. Milano/Napoli. (『普遍の鍵』, 清瀬卓訳, 国書刊行会 [世界幻想文学大系 第45巻], 1974年。)
- Schmidt, F. (1955) : „Leibnizens rationale Grammatik.“ In: Zeitschrift für philosophische Forschung. 9.
- Siebeck, H. (1907) : „Ch. Helwig als Didaktiker (1605–1617) .“ In: Die Universität Gießen von 1607–1907. Hg. v.

der Universität Gießen. 2. Band. Gießen.

Takada, H. (1985) : „J. G. Schottelius, die Analogie und der Sprachgebrauch. Versuch einer Periodisierung der Entwicklung des Sprachtheoretikers.“ In: Zeitschrift für Germanistische Linguistik. (Berlin/New York) 13.

高田博行 (1986a) : 「W. Ratichius (1571–1635) の言語教授法に見られるアクトゥアリテート」, 『ドイツ語教育部会会報』 29.

高田博行 (1986b) : 「Schottelius における『ドイツ語の新時代』への構想—バロック時代の文法家の課題をめぐって—」, 『大阪外国語大学学報』 第72-1号。

Verbarg, P. A. (1976) : „The idea of linguistic system in Leibniz.“ In: History of linguistic thought and contemporary linguistics. Hg. v. H. Parret. Berlin/New York.

Walker, D. P. (1972) : „Leibniz and Language.“ In: Journal of the Warburg and Courtauld Institutes. 35.

Zeller, R. (1974) : Spiel und Konversation im Barock. Untersuchungen zu Harsdörffers „Gespächspielen.“ Berlin/New York.